

父 山崎薫の思い出

十五回生 伊藤(山崎)發子

如春之
如妻

(之を養うこと春の如し)

(昭和46年8月・書)



勲二等瑞宝章受章の時(昭和51年11月3日)

ご指摘の通り山崎薫は私の父でございます。

父がそんなに千里山のために一生懸命になったことは少しも知りませんでした。私はそのころ東京や福岡におりまして、たまに父に会ってもそんな話は少しもしませんでしたので。でも父が、千里山のために少しでもお役に立ちましたとしましたら、嬉しい限りです。

でも千里山には判事や、弁護士、その他政界に有力な方は沢山いらっしゃいましたのに、父が進んで千里山のために努力しましたとしますと、それは父の経験から、困っている人を見ると黙っていられない性格からくると思われる。時にはおせっかいになるのではないのでしょうか。でも父がなぜそういう行動をしたのか、私なりに書かせていただきます。

私の先祖山崎はもと京と大坂の間の山崎の地で山賊だったということです。平安末期に、一族は一応武装しているの、平家に誘われて下つ端の家来にして貰い、「山崎」という姓をつけて貰いました。

しかし平家が屋島で敗れると、主家から放り出され、四国山地に逃げ込んでようやく生き延びました。

戦国時代は長宗我部に仕えましたが又、長宗我部が没落するとやはり四国の山地に隠れました。山内家の長宗我部の家臣狩りが激しく、浦戸の謀殺事件は有名

です。どうも私の先祖は負ける側に雇われるようです。

そこで現在は高知県香美郡土佐山田町、といわれる丘陵地帯で農業と、素朴な刃物造りをしておりました。今の土佐刃物のもとになったと言われております。

父の父(私の祖父)は小地主の一人息子で、小学校では良く出来たそうで、小学校の先生が中学進学を親に勧めたそうです。しかし中学は高知市内にしかなく下宿させるにはお金がかかるし、一家の労働力が失われるということ、実現しませんでした。あまりに絶望している祖父を見て、先生は明治大学が通信教育をしていると教えて下さいました。祖父は猛勉強して明治大学の卒業証書を頂きました。明治二十年代のことです。その先生も偉いですが明治大学も偉いと思います。祖父のように向学心があるのに高等教育を受けられない青年は全国に一杯いたのでしょう。

祖父はそれから裁判所の書記になる国家試験に合格し、職業としては裁判所の書記官でした。しかし祖父が本当になりたかったのは判事でした。何度も司法試験に挑戦しましたが、合格しませんでした。しかしその悔しさから三人息子全員を東京帝国大学(長男と三男は法学部、二男は経済学部)に入れました。父薫はその長男です。だから父は高知市内で育ち、山内家の

若君のご学友に選ばれて、週に何回か山内家のお屋敷に伺っていたそうです。そして大学在学中に高等文官試験(高文)の司法に合格しました。こう言えば大変まじめな青年を想像しますが、本当は大酒飲みです。司法試験の最後の面接は赴任地を決めることになっていたのに、前の晩旧友と大酒を飲み、翌朝友人に「おまん、口がくさいぜよ、試験官に近付くな」と忠告され、面接では下を向いてハイ、ハイとだけ言っていたそうです。そして試験官が「関西地方は希望者が少ないし、君は郷里が土佐だから、大阪へ行ってくれんか」と言われてもハイと答えたそうです。本当は関東地方を希望していたのがつくりきたけど、後で、「関西で良かった、関西の方がおっとりしている」と思ったとか申しております。

そして結婚して、女の子ばかり三人生まれました。この三人が病弱で三人交代で肺炎になって生死の境をさまよう。大阪のアベノに住んでいた時ようやく待望の男の子(長男)が生まれました。ところがその男の子が一歳未満で原因不明の発作を起こして急死しました。ま夜中だったので、お医者さんがよく診てくれなかつたといつまでも恨んでいました。そこで健康に良い、子供の教育に良い所はないか、探しまわっていると大学の先輩で判事の松本さん(あとで高松高裁長官)が千里山に住んでいらっしゃって、「千里山」は庶民が

住むのに最高の所だ」と勧めて下さって、家まで探し下さいました。

こうして私たちは千里山の住人になれたのでした。私たちが全員丈夫でお転婆娘に成長したことは言うまでもありません。

千里山での生活はまず健康第一でした。日曜毎に近隣をウォーキング(これを私たちは遠足と言っていました)しました。例えば茨木の総持寺まで、箕面の滝まで、吹田に映画を見に行く時も往路は歩いて行きました。それには先ず父の「健康でなければ人生何も出来ない」、という信念に基づいているのでした。

父の東大在学中に、親しくして下さった同期生が、江戸時代には大きな藩の家老の家の出身で、学識豊かで風格があり、田舎者の父に東京の歴史やよきたりを教えて下さったそうです。

その方は卒業前に肺結核で亡くなったそうです。あんな立派な人なら総理大臣くらいにはなっていたのに、とよく言っていました。又、人間死んでは何もならない、健康でちゃんとした仕事をするのが人間としてのつとめであると言っておりました。

また終戦直前の昭和二〇年八月の二日位に、旧制高校と東大で同期だった山崎さんがひょっこり訪ね

ところが三日目くらいにかんきさんが「日本は負ける。もう負けちよる」と言ったものだから頭の堅い父と大喧嘩になり、彼は翌日しおしおと旅立っていきました。広島へ行ってみるということでした。

かんきさんは東大法学部を卒業しながら、公務員試験に合格せず、何か大手会社に勤めているということでした。東京には住めんといいって千里山に来たのです。そのあと彼がどうなったのか杓さしとして判りません。かんきさんは千里山に住みたかったと思いません。

敗戦後、父は「かんきをもう二、三日泊めてやったら良かった」とくやんでおりました。私達もあの陽気なおじさんの最期を想像して涙ぐんだものです。

父は転勤が多く退職前には京都家裁所長や北海道の釧路地裁の所長などをして千里山に住んでおりませんでした。家はそのままにして、定年後は千里山に住むのだと言っておりました。若い頃は二年おきに転勤でした。若い判事が、土地の人と癒着しないようにという配慮だったそうです。

それで父が住んだところは高知、東京をはじめとして、大阪市内、姫路、洲本、福岡、神戸、京都、北海道に及びましたが、どこよりも千里山が好きでした。この父も大酒のみの上に、人がやらない逸話が沢山あります。

てこられました。彼も父も山崎なので、彼はすぐ怒り出すので「かんき」というあだ名だった。かんきとは高知弁で、すぐカツとなる人という意味だそうです。

「かんき」さん(旧制高知高校時代の写真)



彼自身が父にくれたもの。広島
の原爆で亡くなったと思われる。
父はこの写真をいつまでも大切に
していた。

彼は物資欠乏の時代に三人の育ち盛りの娘がいる家に来て、当然の如くゆっくり構え、三、四日は我が家にいました。あとで父にきいた話では広島出身で天涯孤獨、しかし父親がかなりの地主だったので生活や学費には困らない人ということでした。

彼は学生時代、屢々父の所へ来て、一週間位泊まっていたそうです。なかなか面白いおじさんで独身、ヨメを貰いたいけど誰も来てくれないとぼやきながら、自分の見合いの失敗談をして、皆を笑わせていました。

私が一番覚えてるのはスキヤキ騒動です。

京都家裁の所長の時、勤務中心臓発作で倒れ、京都府立病院?に運ばれました。面会謝絶、二日間水以外は口に出来ない、しかし腹ペコで死にそう。そこで二日目の朝トイレに行くついでに、部下(書記官)でいつも一緒に飲み歩いている〇氏に電話して、次のように命令しました。「スキヤキの用意をしてこい。工事用のナツパ服を着て、コンロと鍋、材料をゴザに巻いてかついでこい、夜は裏門は開いている。もし誰かに見つかったら電気工事ですと言え」(なかなか悪知恵が働く)。そして〇氏が無事に病室に辿り着き、二人で楽しくスキヤキをしていると急にけたましくベルが鳴る、廊下を幾人もの人が走り回って「火事だ」と叫んでいる。どこが火事かと思っているとドアが開けられて、見つかってしまった。コンロの熱で天井の火災報知器が鳴り出したらしい。その後院長先生以下からキツク叱られ、名簿には「危険人物」という註が赤字でつけられていたそうです。

〇氏の仲人は父が務めました。浮気をした女子供(男の子)ができ、奥さんには出来なかつたので、父が奥さんを説得して、その男の子を赤ん坊の時分から引き取り、立派に育てたということです。また〇氏は父の奨めで昇格試験に挑戦し、簡易裁判所の判事になりました。父の葬儀の時、一番泣いて下さったのは〇

氏でした。

また、父が亡くなった時の新聞記事によると、現在よく行われている裁判の再審を、戦後日本で「昭和の巖窟王事件 1963 再審無罪」に次いで決定したのは父だそうです（「金森老事件 1971 再審無罪」）。その事件は戦前の昭和16年1月朝鮮釜山で、自分の勤める工場に放火したとして、懲役十五年の判決を受け服役したが、ずっと再審要求をしていたそうです。

父はよく調べて無罪にした由。父は困った人を見たら助けたいと思うのでしょうか。

父はよく冤罪の話をしておりました。日本の裁判所は冤罪を認めないが、裁判官だって間違ふことがある。それを認めないのはケシカラン。本人にしたら大問題なのに、とよく言っておりました。

私達が二年間ドイツへ留学する時三人の息子（小一、小一、幼稚園）を預かってくれました。千里第二小学校の運動会や父兄参観日は仕事の都合をつけて熱心に見学していたそうです。だから息子達も千里山大好きです。その後息子達は夏休みになるとすぐ千里山へ行き夏中おりました。高校になるまで続けておりました。父も大喜びで、孫たちを連れて、奈良、京都、ビワ湖まで遊びに行き服部のプールが一番面白いと言っておりました。



数少ない父の全身が写っている写真

父のびやかな字、最も父らしい字です
昭和二十一年五月
益弘益 摩国湖
展覧会を
山崎 暁

二伸
父の本「法窓憂楽四十二年」6ページに自分の家族のことを書いていますが、「私のきょうだいは男三人、

三人の息子は毎年夏冬千里山で遊んでいた。



親がドイツ留学のためこの三人を一年間千里山で預かってくれた。長男小二、二男小一、三男がグレース幼稚園に通った。だから息子達も千里山の皆様と同窓生です。

このように大酒飲みで遊ぶのが大好きですから我が家はご近所にくらべて一番みずぼらしい。私達がお隣はピアノがあるのにうちは何も無いと文句を言いますと「裁判官が立派な家に住んでいてはおかしい」と言いわけしておりました。

それでも七十才の時、勲二等瑞宝章を頂き、念願通り定年後は千里山に住んで、七十五才で亡くなりました。

千里山の皆々様に心より厚く御礼申し上げます。

女三人……次弟益弘稔（まきひろのぶ）について「高知随一の歌手」とありますので一寸説明いたします。

父の弟益弘稔は東大在学中に益弘家の婿養子になりました。益弘家は山持ちで裕福でした。稔は子だくさんで八人の子供がおりました。戦時中三十代半ばで招集され、中国へ行かされました。その部隊で歌のうまい人がいて、「南国土佐」の歌を自分で作詞作曲して、皆を慰めていたそうです。

戦後帰国して、NHKでのど自慢が始まり、おじさんは南国土佐を歌って、全国優勝しました。その後NHKからのど自慢の審査員に選ばれ、喜んで全国を飛び回っておりました。職業は土佐電鉄勤務。六十才で死ぬ時は土佐電鉄の副社長でした。仕事そっちのけでのど自慢の審査員をし、南国土佐の歌のレコードまでNHKで作ってくれました。

それをきいたペギー葉山さんがこの歌を私に下さいと言ってきたので「どうぞどうぞ」と承諾したそうです。ペギーさんはおじの歌に手を加え、歌ってはやらせました。

私達は「ペギーさんからお礼くらい貰ったの」と聞きますと、「そんなものいらんから断った」ですって。

山崎家アルバムより



↑母と共に友人の結婚披露宴で
(昭和 32.10)



東大入学の時(大正 15.4 19歳)
父親ははじめ一家の期待を双肩に担って上京。三年間知人の家に下宿。その家の下男とともに水汲み、風呂掃除などして手伝う。

↓大阪高裁・裁判長時代



本稿編集中の2月6日深夜BSジャパン「昭和歌謡ヒット曲秘話」を聴いていると、ベギー葉山さんの「南国土佐をあとにして」の話があり釘付けになりました。二三六連隊「鯨部隊」で生まれたこと、戦地で実際に唱った方の正調原歌とベギーさんの歌のオーバーラップ、丘京子さん・鈴木三重子さんの先行レコードなど、ご著書所収の「南国土佐をあとにしてのいわれ」と一致する内容でした。残念ながら益弘稔氏には触れられませんでした。(奥田記)

おじさんは歌がうまいだけでなく、高知にいろいろな事業を起こし、皆失敗して、益弘家の財産を使い果たしたそうです。

例えば学生時代はマージャンを東京から持ち帰ってはやらせ、戦後はボーリング場を作り、テニスコートを作ってテニスをやらせ、家では大きいシエパードを二匹飼っていました。どの事業もおじのまねをした同業者にやられて、つぶれました。でも製材業(ついでに下駄と割り箸を作った)だけは真似する人がいなくて、今も田舎の土佐山田町に残っています。

この工場では大きな小屋を建て、サービスマンで映画を写し、村人に無料で見せていました。おじのいとこが映写機を扱っていました。この映画を幼い頃から見て育った親戚の子が原平(ハラタイラ)です。

それでも会社をクビにならなかったのは、会社の野球部のため、月給を皆寄付していたからだそうです。このおじも心臓発作で東京で急死しました。叔父の葬式(社葬)の時は交通整理の警官が出るくらいの人だ

つたそうです。余談ですがおじの娘の一人幾子(私の従妹)は東大農学部卒ですが、高知でははじめて東大に行つた女性だそうです。

追記

土佐山田町の映画小屋について一寸説明申し上げます。この小屋はもともと製材所の所有者であった原家が建てたものです。原家は父や稔おじの母シナの実家です。村人たちが夕食後、バクチをした酒におぼれたりするので、工場の敷地に小屋を建て、皆が集まるようにしたそうです。それを工場ごと受けついでおじが映画上映を思いつき、夕方六時から、二、三時間映画を写しました。フィルムは京都の太秦撮影所におじの友人がいたので、廃棄するフィルムを貰ってきて、おじのいとこが上映しておりました。

夕方になると村人達が、家族と共に各自座布団と湯のみを持って集まってきました。勿論無料です。小屋の隅には大きな火鉢の上に大きなヤカンがあつて各自がお茶を入れて飲んでおりました。同じ映画が何度か上映されてきました。フィルムは不良品ですから時々話が途切れストーリーが判らなくなったり、映写機が故障してまっ暗になります。それでも誰も文句を言いません。そんなときは隣り合っている村人たちが楽しくおしゃべりしておりました。この映画小屋もテレビの普及で廃止となりました。

完

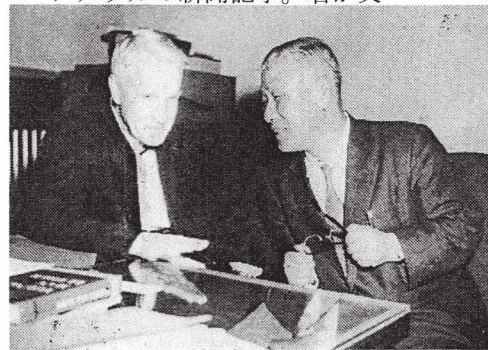


千里山の家の庭で、發子と博史
子供達は、父の盆栽を柵から地面
に下ろして、自分たちの野球道具を
並べていました。



千里山の家の門の前 妹 母 父

アメリカの新聞記事。右が父



← 1960年9月、イリノイ州のクック
カウンティ巡回裁判所(シカゴ)
刑事部グート・クネヒト判事の
法廷を傍聴し、シカゴ・デイリー
トリビューン記者と、欧州・米国
・日本の刑事裁判制度の比較につ
いてインタビューした記事が掲載
された。
(同紙から送ってきた写真)



← 1960年8月、ニューヨーク大学
にてシェルドン・D・エリオッ
ト、ファンイー・クライン両教授
と会談した時のもの。



三人の息子 淳 博史 やすよ
養世

↓ 旧制高知高校寮歌祭にて



前で踊っているのが父



←夏休み中千里山で遊び博多へ帰るところ、新大阪駅にて父写す

孫達を父が写す→

小学生時代は大阪博多間往復を三人で飛行機に乗っていた。「チビッ子の一人旅」(日本航空)の初めての試みであった



←福岡金印公園にて

「漢倭奴国王金印発光之處」碑の前で千二小 15 回生高橋景一(東大教授)夫妻と(真中のお二人が高橋氏ご夫妻)。

高橋氏と主人(伊藤利男)は東大で同期生であることが判り、御来福いただいた、主人は長野県出身。

また 15 回生の赤羽隆夫氏と主人は旧制松本高校と東大で同期であることが判り、福岡へ来て下さった。主人は独文科、赤羽さんは法学部。

小学校の同窓生とこうした交流ができるのは幸せなことです。



昭和 12 年頃
箕面へ行楽に行く
(写真屋が撮る)

母和子 父の妹 父の弟 父薫
たじ子 景明(東大法)
三人の娘



千里山に住んでから心が落ち着いたのか、親戚、友人を呼び集め箕面や六甲、京都、奈良などに連れて行き「良い所だろう」と威張っていた。
昭和 50 年頃京都家裁所長官舎(旧三井別邸)にて、下賀茂神社の旧境内にあり庭 1000 坪建坪 250 坪とか、広くて住むには大変でした。中央が父、娘や孫達と。